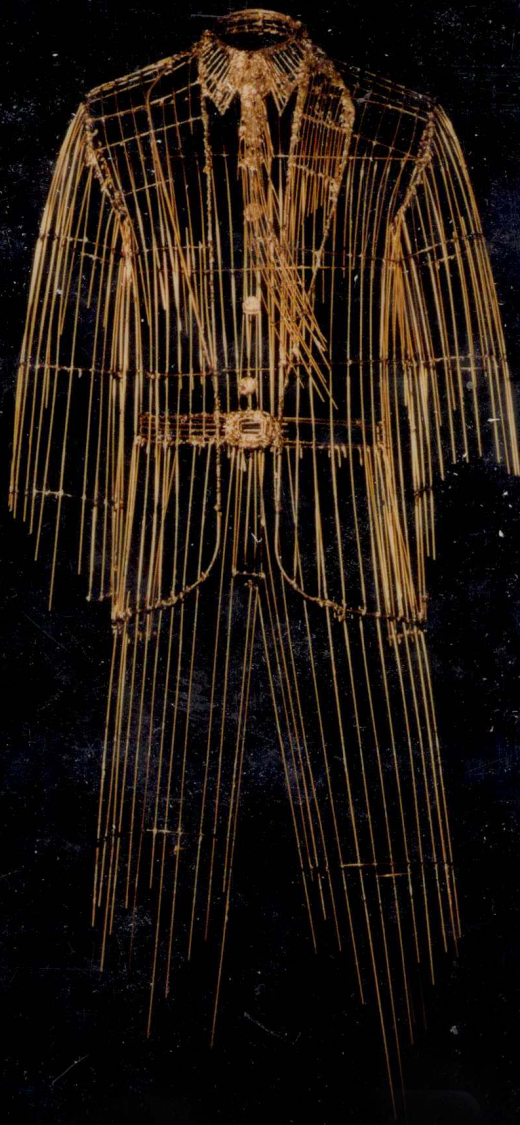




飛ぶ男 The Flying Man

安部公房 Kobo Abe

と 飛ぶ男

著者……………安部公房(あべ・こうぼう)

発行……………1994年1月22日

発行者……………佐藤亮一

発行所……………株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

【電話】営業部03-3266-5111

編集部03-3266-5411

【振替】東京4-808

印刷所……………大日本印刷株式会社

製本所……………大口製本印刷株式会社

©Neri Mano 1994, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-300810-5 C0093

目

次

Contents

|

飛

ぶ

男

The
Flying
Man



0
0
7

さ
ま
ざ
ま
な
父

Fathers
of
Many Kinds

1
0
9

オブジェ 藤掛正邦
撮影 影 額賀じゅんじ
装幀 新潮社装幀室

飛
ぶ
男

The Flying Man

飛
ぶ
男

患者名 保根治（ほねおさむ）男 三十六歳 高校教師

主訴 頑固な不眠 もしくは不眠幻想

病名 「仮面鬱病」ならびに「逆行性迷走症候群」の合併症

飛
ぶ
男

ぶつぶつと
呪文のように
さつまでも……

0
1
0

The
Flying
Man

1 飛ぶ男

ある夏の朝、たぶん四時五分ごろ、氷雨本町二丁目四番地の上空を人間そっくりの物体が南西方向に滑走していった。月明かりを背にした輪郭から判断したところでは、フィルム会社が宣伝用に飛ばしている新型の気球らしくもある。時速二、三キロ。しかし目が慣れるにつれて、首を傾げざるをえない。ガスを詰めただけの浮遊物体に、あんなルールに乗ったような直線飛行が可能だろうか？ どう見ても意思を持った自力走行である。知らないうちに完全に透明なハンググライダーが発明されたのかな？ だとしても、電線すれすれの水平飛行は危険すぎる。あれほどの低速でしかも正確な直線飛行は、ヘリコプター以外にはありえない。でも回転翼からの風なら上から下に吹きつけるはずだ。着衣の表面を走る縮緬皺は、高速道路の吹き流しみたいにはっきり横方向にはしっている。もしかすると、うっかりベッドから漂い出した夢遊病者かな？ そのつもりで見ると、裸足だし、

着衣は洗い晒した細綿のバジャマ風で、とても外出着とは思えない。

しかし眠っているわけではなさそうである。何かを左手に持ち、耳に当てがっている。唇の動きも、誰かに喋りかけている感じ。携帯電話だ。

《飛ぶ男》の出現……。

目撃者は三人いた。

その中の一人が衝撃のあまり、発作的に空気銃で狙撃してしまったのだ。ガス圧を使った二連発式の強力なやつで、鼓型の鉛の弾が二発とも命中した。

一発は左肩の付け根、もう一発は左の乳首。左肩の弾は筋肉で押し返されたく、すぐに爪先でほじり出せたが、乳首のは激痛と出血のため放置するしかなかった。

狙撃者の過剰反応には、それなりの理由があった。運の悪い男性遍歴のあぐく重度の男性不信におちいつていた二十九歳の独身女性が、界限に出没する暴行魔（指名手配十六号）の噂を耳にして以来、次の犠牲者は自分だと思い込んでしまったのである。不眠に悩まされ、食欲不振におちいつた。勤務先での仕事ぶりにも変化が目立ち始める。市立病

院の神経科で処方してもらった安定剤のたぐいはほとんど効果がなく、心配した同僚のすすめで購入した高性能の護身用空気銃を装填済みにして常時ベッドの枕元に備えておくことにした。効果はあった。血色もよくなり、体重も徐々に回復の兆をみせはじめた。しかし二十九歳の独身女性性が、狙撃の腕を自慢するわけにはいかない。できれば隠しておきたい。《飛ぶ男》の目撃談も、おかげで未然に封じられたというわけである。

二人目の目撃者は、腎臓疾患のために利尿剤を常用している暴力団の構成員で、ちょうどその時刻に尿意をもよおす習慣になっていた。しかし、夜明けまでにあと三十分、普段なら手洗いに行った記憶さえはつきりしない熟眠の時刻である。ただその朝は台風が通過した直後で、カーテンの隙間から漏れる月齢17・4の輝きはびっくりするほど刺激的だった。日頃から川柳をたしなんでいたせいか、欲が出て、ついカーテンの隙間を押し抜けてしまう。題材にはなりそうにない《飛ぶ男》を認め、覚醒した。通報の義務を感じたが、思いなおす。暴力団員にそんな社会奉仕は似合わない。警察も、気象庁も、彼にあらぬ嫌疑をかけるのがおちだろう。

がきのころ美術クラブに籍をおいていた経験を生かして、折り込み広告の裏にマジックペンでスケッチしてみた。かなりの出来だとは思ったが、それっきりでいまなお押し入れ

の隅に置き忘れられたままになっている。

三人目の目撃者は、《飛ぶ男》の携帯電話で呼び出しを受けた。

2 深夜の電話

電話が鳴っている。

保根治は反射的にベッドから降り、寄木まがいの合板の床に立つ。受話器を見据えるだけで、すぐには手を出さない。腕時計の針は午前四時五分、電話に付き合ったりする時間ではない。目を覚ました記憶がないから、夢のつづきかもしれないし、じつはまだ眠っていないか、怪しいものだ。すべてがわざとらしく、嘘っぽい。電話の音だって本物かどうか、怪しいものだ。

仮に本物だとしても、どうせ間違ひ電話さ。午前四時に保根を懐かしがったりする変わ